

私と近藤誠さんと

日本では「がん」という病名を隠す時代が長く続いていました。

次にやってきたのが、「患者の性格をよく観察し、大丈夫と見極めがつかいたら告知する」という時代です。

これに真っ向から異議を唱える近藤誠さんが朝日新聞に訪ねてこられたのは、1986年のことでした。近藤さんのやり方は徹底していました。

- すべての患者に病名を知らせる。
- 患者自身から依頼があったとき「のみ」、家族「にも」知らせる。

「告知」という言葉も使わない、と近藤さんは言いました。「がんより死亡率が高い病気や苦しい病気が他にいくつもあるのに、がんだけに『告知』というおどろおどろしい言葉を使うのはおかしい。それに、この言葉には高い立場から知らしめるといふ尊大な響きがある」というのです。

確かに、「がん告知」という言葉自体、がんへの恐怖を生み出すのに一役買っています。

88年、私は朝日新聞のコラムで近藤さんの3年間の実践を紹介し、次のような言葉を引用しました。

「がんと知らせて自殺された方は、1人としていませんでした。自暴自棄に陥ったり、食欲をなくして死期を早めた方もいません。逆に病棟に笑顔が生まれ、患者、家族、医師の風通しが良くなりました。なにより治療成績が向上しました」

「病名を知らせるのは、それが治療の入り口だからです。医師の使命は患者さんと一緒に選んだ治療の実行に最善を尽くすことであって、治療を選ぶ権利は患者さん本人にあるはずです」

前略
拙書を出版社の方へ送るせはせず
すか届きましたでしょうか。思っておこせは
二年前に由紀子さんとの出会いがあって、それ
が一天さんとの出会い、記事につながり、それが
う各社のインタビューがありとうようになつたのでイ
り、今回出版のお勧めということになつたのでイ
昔考えていた道とはずいぶん離れたところを
歩いてゐるような気がします。一年後にどうなつて
いるのかもよく分かりません。し、常に患者さん
の側に立ってゐたいとは思つております。
様々な思ひをこめて、あつたためて拙著をお送り
させて頂きます。御函人の御活躍をお祈りして、おま
草又